平成 21 年度　三重大学地域貢献活動実施報告書

「小学校における多文化共生教育の実施」

報告者：教育学部　林朝子

【概要】

活動場所：津市立一身田小学校「世界を結ぼうクラブ」

担当教員：富田幸代・秋澤シルビア・藤ノ原デボラ（一身田小学校）

林朝子・別府直苗・蓑川恵理子（三重大学教育学部）

参加児童：５年生７名、４年生 10 名、計 17 名

事前打ち合わせ：4 月 12 日、5 月 12 日、毎クラブ終了後

活動目的：多文化共生をテーマとした活動に子どもたちが積極的に参加し、活動を通し様々な文化を知り、互いに認め合い、対等な友達関係を作りあげること

活動内容：

回/月日	活動内容	支援参加
①5/18	【ブラジルってどんな国？】 ・写真を使って、ブラジルの地理や風土をゲーム形式で知る 【DVD 作成準備（１）】 ・ブラジルの日本人学校に送る DVD の内容について考える ・日本の小学校の特徴であるクラブ活動を取り上げることにし、３つのクラブ（「将棋」「生け花」「頭の体操」）について報告することにする	林
②6/15	【DVD 作成準備（２）】 ・シナリオ作成、ナレーションの練習を行う	林 学生７名
③7/13	【DVD 撮影】 ・３つのグループに分かれ、各クラブ活動の場所へ行き、活動の様子をリポートし、参加している友達にインタビューを行う ・DVD は編集後ブラジルの日本人学校へ送付	林 学生７名
④10/19	【日本とブラジル：学校を比べよう】 ・両国の学校文化の違いを知る	林・別府・蓑川 学生 13 名
⑤11/16	【ブラジルの遊びを体験しよう】 ・Batata quente（バタタ・ケンチ/じゃがいもは熱いよ）というブラジルの遊びを皆で行う	林・別府・蓑川 学生 13 名
⑥12/7	【Pave（パヴェ）を作ろう】 ・ブラジルのクリスマスデザートを皆で作って食べる ・デザートを通して、北半球と南半球の違いを体験する	林・別府・蓑川 学生 13 名
⑦1/18	【日本の中の世界？！】 ・日本語の中の外来語の由来について、クイズ形式で考える	林・別府・蓑川 学生 13 名

⑧2/15	【世界〇×クイズに挑戦】 ・学生が作成した世界の国々に関するクイズに〇×で答える	林・別府・蓑川 学生 13 名

【成果】

１）日本文化（自文化）理解と発信

第１～３回のクラブ活動ではブラジルの日本人学校に日本の学校紹介を行う DVD 作成を行った。話し合いの中で、子どもたちはブラジルと日本の学校の違いを考え、自分たちが日々通う学校にも日本文化が自然と入っていることに気付けた。子どもたちが自分たちの学校文化を日本文化としてブラジルの友達に紹介したいと思えたことは、自分たちの文化に誇りを持てたからであろう。そして、DVD 作成への積極的な参加は、子どもたちが主体的に自分たちの文化・自分を主体的に表現し、相手に伝えようとした姿勢の表れといえる。

また、第７回のクラブ活動では、日本語の外来語（コーヒー、カステラなど）を取り上げ、普段使用している日本語の中にも外国文化が入りこんでいることに大きな驚きがあった。日本文化を外の視点から見直すきっかけとなった。

２）“違い”の受け入れ

第１回、４～６回のクラブ活動ではブラジルを取り上げ、ブラジル文化を身近に感じ、文化の違いを自然と受け入れられるように工夫した。ブラジルを中心に扱ったのは、一身田小学校では 20 名弱の外国籍児童が在籍しており、その多くの児童がブラジルにルーツを持っており、子どもたちにとってもブラジルが身近な国・文化であることを感じてほしかったからである。

第６回の活動では、ブラジルのクリスマスデザート“パヴェ”を作ったが、クラブ時間内だけの「楽しい」ではなく、何人かの子どもたちが後日家庭でも“パヴェ”を作っていた。一度だけの体験には終わらず、学校から家庭へと継続的な活動につながっている。

３）教員志望学生への多文化共生教育

第４～８回の活動には、教育学部の学生 13 名が支援参加した。その多くが教員を志望している。活動に支援参加することで、活動の意義や子どもたちの反応や感じ方を直に体験でき、学生自身が多文化共生について意識を深め、将来教員としてどのように多文化共生の意識を子どもたちに伝えるのかを考える契機となった。

【まとめと今後の課題】

本活動は、総務省の「多文化共生推進プログラム」で定義されている多文化共生の考え方（「国籍や民族など異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」）につながるものと位置づけられる。将来子どもたちが大人になった際、「多文化共生」を意識せずに、皆で共に生きる社会作りを目指すためにも、教育的活動として意義のあるものであろう。

このような活動を単発ではなく継続的に行う中で、子どもたちは多文化共生を感じ取れる。そして、多文化共生意識が、子どもたちを発信源にし、友達、家族、地域へと広がっていくよう、今後も連携を続けていく予定である。